

The Homeland

～故郷へ帰還するシリア難民～



アサド政権崩壊後、13年ぶりに故郷に立つ夫ラドワン。廃墟が広がるシリア中部パルミラにて。2024年12月。

小松 由佳 写真展

入場
無料

2025 12.16 木 TUE — 2026 1.13 金 FRI

※ギャラリー閉室:2025年12月26日(金)~2026年1月6日(火)

時間 10:30-17:30
(最終日は12:00まで)

会場 ワセダギャラリー
早稲田大学27号館地下1階

長らく、帰ることが許されなかった故郷へ。心に押し寄せたのは、喜びと、深い悲しみだった。シリア中部パルミラ。2024年12月。

The Homeland

～故郷へ帰還するシリア難民～

アラビア半島の北西、中東に位置するシリア・アラブ共和国は、2011年に勃発した内戦により、長期にわたる混乱に見舞われてきました。内戦勃発前の人口約2240万人のうち、50万人以上が命を落とし、約500万人が難民として国外に逃れ、約720万人が国内避難民になるという未曾有の事態は、国連によって「今世紀最悪の人道危機」と評されました。

しかし2024年12月8日、半世紀以上にわたり続いたアサド政権が崩壊し、情勢は一変します。現在シリアでは、暫定政府のもとで復興に向けて動き出しており、故郷を離れていた難民や避難民の多くが帰還を始めています。

本写真展は、ドキュメンタリー写真家である小松由佳が、この激動の時代に難民として生きるシリアの人々を見つめた記録です。

小松は、かつてラクダの放牧を生業としていた夫の家族が、武力衝突や空爆によって故郷を追われ、難民となる様を目の当たりにします。彼らが難民として身を寄せたトルコ南部のシリア難民コミュニティを中心に、継続的な取材を重ねることで、「難民として生きることの意味」を問い続けてきました。

写真家として、そしてシリア難民の妻として、小松が目撃し記録した、激動の時代を生き抜くシリアの人々。その姿を、本展を通じてたどります。

- 1 母親を恋しがる息子をあやす父親。トルコ・シリア地震の被災者キャンプにて。トルコ南部ハタイ県。2023年6月。2 アサド政権崩壊直後、行方不明者の捜索ビラを貼る夫。シリア、ダマスカス。2024年12月。
3 2011年以降の内戦によって荒れ果てたナツメヤシのオアシス。シリア中部パルミラ。2022年9月。
4 牛を飼うシリア難民の母子。トルコ南部オスマニエ県。2018年。

主催：早稲田大学総合人文科学研究センター「拡大するムスリム社会との共生」部門、早稲田大学高等研究所「人新世と人文学」プロジェクト
共催：早稲田大学総合人文科学研究センター「イメージ文化史」部門、早稲田大学カーボンニュートラル社会研究教育センター「環境人文学の基盤形成—いのちをめぐる時間と空間」プロジェクト

2025 12.16 木 TUE — 2026 1.13 金 FRI 10:30–17:30 入場無料
※ギャラリー閉室：2025年12月26日(金)–2026年1月6日(火) (最終日は12:00まで)



ギャラリートーク
■2025年12月20日(土)
14:00–15:30
ゲストスピーカー
安田 純平(フリージャーナリスト)
■2026年 1月10日(土)
14:00–15:30
ゲストスピーカー
常味 裕司(ウード演奏家)
小松 由佳 在廊予定
2025年12/16・17・20・21・24・25
2026年 1/7・9・10・11・12・13

小松 由佳 Yuka Komatsu
ドキュメンタリー写真家。早稲田大学総合人文科学研究センター招聘研究員。日本写真家協会会員。東海大学山岳部にて本格的な登山を学び、2006年に世界第2の高峰K2(8611m/パキスタン)に日本人女性として初めて登頂。その後、モンゴルの草原や中東地域の沙漠を旅し、放牧民や遊牧民の暮らしに強い興味を抱く。多様な人間の暮らしを表現することを志し、写真家へと転向。『シリアの家族』(2025年11月刊行)で開高健ノンフィクション賞受賞。
小松 由佳 HP